

融通念仏縁起絵巻と与野

清凉寺所蔵の融通念仏縁起絵巻の下巻の第9段「正嘉疫癘（しょうかえきれい）」という段に、「与野郷（よのごう）」が出てきます。この段は長さ約284cmあり、まず室町幕府管領斯波義重（しば よししげ）筆の31行にわたる詞書があり、やまと絵の代表的な御用絵師である土佐派の藤原（土佐）行秀による絵が後に続いています。詞書の内容は次のとおりです。

正嘉年間（1257～1259）の頃、疫病が大流行した。武蔵国与野郷の一人の名主が念仏を信仰し、家人にも念仏を勧め、その人の名字を番帳（融通念仏信者の名簿）に書いて道場に置いておいた。その夜、夢で疫神が家に大勢押しかけたので、念仏に努めるために名字を書いた番帳を見せたところ、よろこんだ様子で疫神は各人の名字の下に判を押した。ただし、他所にいる娘の名字は書いていなかったため、念仏の仲間に入りたいと懇願したが、疫神はこれを許さなかった。夢が覚め、番帳を見ると、夢のとおり名字の下にいろはの字を書き損じたような判が押しあてられていた。番帳に名字が記載されていた家人には何の異状もなかったが、記載されていなかった娘は病死してしまった。

また、絵の部分は三場面に分かれ、名主宅で念仏を修している場面、門前に群がる異形の疫神の乱入を名主が阻止している場面、最後に他所にあって念仏衆に入らなかったために亡くなった娘の場面となっています。

これは念仏の功德を説き、民衆を教化するための説話であり、登場する名主がだれかについては不明ですが、正嘉年間に諸国で疫病が流行したことは史実である上に、「与野郷」も実在したことを考えると、全くの創作でもないようです。

ここに記される「与野郷」という地名が、現時点での「与野」の地名の初見です。